冬から春へ
――無患子（むくろじ）――

蕪木　寿江

朝顔の種を丹念に取っていたR子が話しかける。
「ねえ、先生、秋は夏をちょっと連れて秋になったの？」
「――」
「だって、朝顔は夏でしょ？」私は笑ってうなずく、その自然な発想に感心していると、言葉が湧きでるように「いっぱい咲いてたおしろい花もそうだ。毎日、毎日、ビニールの袋に色水をつくって、おうちへ持っていったもんね」草花をというより灌木のような装いのあるおしろい花は、その花の色といい量といい取り安い高さといい、この花は取ってもいいという親しさが加わって、よく遊んだ。残りの花が一つ、又一つと、思いだしたように咲く中で、黒い小さな実をみつけ、爪で割っては白い紛を顔に塗る。「つるつるするよ」と言って、友達にも同じことをさせる。「先生の顔も白くなるよ」と、割ってくれる。「みんな、見て見て、先生の鼻の頭白いよ。」と喜ぶ。実がなくなるとその枝ぶりからおしろい花の木はパチンコになって、ボール紙でつくった玉を寒空に向って飛ばす。
R子、六才、二才上の気弱な兄がいる。背も高く体力があるが、逆上りができない。登園すると寒くても鉄棒が空いていると飛んでいって練習する。五月生れで、物ごとの理解が早く、友達をリードしながら遊ぶことが好きなので、不得意なことがあることがよい場合がある。ちょっと助けてあげるとできるのだが、要領をつかむまでに時間がかかる。
「Nちゃん、上手だね」「Mちゃん、昨日できなかったんだよ」と、くやしがるが、逆上りそのものよりも、先生に支えて貰うことの方が嬉しいようなR子だ。年少の時から些細

なことに怒りを爆発させては、周りの友達をあたりかまわずぶったり、椅子や積木を投げた。先生がとめると先生を蹴とばしあざができる程だった。

年長になった六月下旬、教育実習生と迷路をつくって遊んでいると急に怒りだし、せっかくの積木の路をこわしだした。一生懸命に説得しているのに怒りはつのるばかり。遂に、「お前なんか幼稚園の先生になるな、あっちへいけ――」と叫んだ。

「ここは行きどまりにしようと言うので積木を横においただけなんです」と実習生は青ざめて呆然と立ちつくしていた。「子どもは誰でも気分転換の名人だから大丈夫よ」と言ったものの、まだ積木をふり上げているので、外の子ども達の方にいくように促した。迷路を全部こわすといくらか治まったような顔つきになった。私はだまって背中を撫でていた。それがきっかけのようにR子の暴発も続いて三度あった。部屋で遊ぶより、美しい自然に助けられた方がいいという思いがいつもあるので、なるべく園庭で遊ぶように心がけたが、鬼ごっこをしていた筈のR子が急に怒りだした。しかしそれは短くすんだ。最後は一番前の真中で紙芝居を見ようとして、そこに座っている友達の中にあとからきて割り込み、椅子をとって泣かせてしまった。こちらが少しでも怒って注意すると、すぐその心をつかんで怒りに対する抗議をする。全く鏡のようなものだ。全身で自分の知識と知恵をしぼって悪い言葉を矢つぎばやに並べる。R子の涙を自分のハンカチで拭いてあげているT先生に向って、「お前なんかやめちまえ、死ねー」と泣き叫けんだ。「R子ちゃん、どうしたの」と声をかけにきた他の先生にまで、「お前なんか関係ないだろう。あっちへ行け

――」とどなる。R子に写るものは、困惑している先生の像と、自分への不信感を抱いている大人の表情だけが克明に見えるのだろうか――。廊下の隅でしばらくお互いの涙を見ているうちに少しずつおさまってくる。母親に話しても、「又、やったんですか……うちの子はそうなんですよ」と、憮然とした表情で、「悪いのは幼稚園」とでも言いたそうな口調でしかない。お迎えにきても、手をつないで帰るわけでもなく、お母さんの足早やのあとを走ってついていく後ろ姿を何度もみた。家庭と幼稚園が両輪であり、同じ目的に向ってこの大切な幼児期を過ごさせたいと、月に一度の母の会を設けて話しているが、人に言われても解ろう筈がなく、自分で納得し、自分が変わらない限り子どもを変えることはできそうもない。T先生のやさしい涙に心が動いたのか、それ以来あの怒りはどこかへいってしまった。

「ねえ先生、冬は秋を少し連れてきたね」と、無患子の実を取りながら話しかける。R子の素直な発想の展開に感動してうなずきながら笑いかける。

十周年に苗木を戴いてから十二年経って実を沢山つけた。去年は二、三十個程だった。今年は千個近い数である。

友達が無患子の皮をむいていたら、丁度前にいたA子の眼に汁がとんだ、R子と背の小さいA子とは大の仲良しで、すぐに自分のはんかちを眼にあてさせていた。「痛い、痛い――」と言ってA子は泣きだし、私はあわてて蛇口を上に向けて眼をパチパチさせた。それでも癒らずしばらく泣いていた。今までのR子だったら、汁をとばした友達を怒り散ら

していただろうに――。困っている友達にも、「わざとやったんじゃあないからね」と慰める言葉をかけているのだ。

だんだん無患子の実が茶色になって、からからと音をたてすけて見えるようになった。「乾いてきたんだね。汁がとばなくなったね」と、それでも加減して皮をむき「石けん」「石けん」と言いながら泡の中から黒い実を洗いだす。早速その実で、羽根をつくる。千枚通しでは小さい穴しかあかず、一枚のリボンをやっとさし込んで、ボンドでとめる。「もっと太いもので穴をあけないと駄目だね」「羽根が飛びすぎるよ」「もう一枚つけよう」「まだ飛びすぎ」「もう二枚つけよう」とリボンをセロテープでとめていく。牛乳のキャップの上のビニールで実をくるむ。しばらくついているがすぐ切れる。今度は二枚重ねて包む。以前は女の子の遊びであったが、今では男女を問わずその音に魅かれてか、白い息が飛び交う。「ひとーつ、ふたーつ」の繰り返しでなかなか「みっつー」の声は聞けない。男の子がバットのように羽子板を持って投げ合うように打つ。「よっつ、続いたよ。上手だね」とR子は友達のことをよく感心する。

「無患子」とは、なんという素敵な名前だろう。誰がつけたのだろう。「患いの無い子に育つように」と、新年を祝ってのことか――。お正月が過ぎると羽根つきも一段と上手になってくる。子どもが好きな遊びは先生も好きだし、先生の好きな遊びは子どもも好きなような気がする。先生になる人は、幼い日にいっぱい遊んでいた人がいい。凧と隔年に羽子板をつくるが、子どもがつき安い巾と軽さ、大きさが望ましい。細い小さい既製の板

は、値段は安いが今一歩という気がする。

「ねえ先生、春は冬を連れていってしまうね」R子が窓を見ながらしみじみ話す。近くの川（鶴見川の上流）のゆりかもめの数が減ってきた。一羽が舞っているのを見たのは十一月であった。光りを集めて飛んでいるように見えた。一羽を見つけた日、R子は一人、一人に「ゆりかもめ見た？　こんど飛んでいたら教えてあげるね」と言って歩いていた。

子ども達と一緒にいた無患子もすっかり葉を落し、春への準備を始めているのだろうか。

ぶらんこ揺れ無患子の花ひそやかに

無患子の緑のままにこぼれけり

無患子を奪い合っては分けにけり

枝に残る無患子の実の珠玉のごと

（市ヶ尾幼稚園）